

英語科目教育法

－成長し続ける英語教師を育てるために－

How to Teach English in Junior and Senior High School － A Study About the Syllabus of English Teaching Method－

江坂栄子 (Eiko ESAKA)

I はじめに

現在、現職の英語教師による研究会は名古屋地区だけでも相当数存在している。校務、部活動指導の合間をぬい、平日の夜、週末を使って集まり、指導法、教材等について研究をしている。特に中学校の先生方は本当に忙しく、寝る時間を削っての研修である。しかし、英語教師はいつも悪口を言われ続けてきた。「学校で10年も英語を勉強しても全く役にたたない」「話したり聞いたりすることができない」言われる度に、自責の念にかられた教師は多い。そのため仲間を集め研修会を開き自主研修を続けてきたのである。それでも、英語教師はいつも自信がなく、どこかに不安を抱えつつ生徒の前にたっている。高等学校では、平成25年から「英語の授業は英語で行うことを基本とする」ということでさらに不安をつのらせている教員は多い。

日本の英語教育は「外国語教育」である。幸運にも日常的に英語を使うことはあまりない。大半の生徒は「学校の科目」だから勉強しているのである。「将来使うかもしれないから勉強しなさい」では学習意欲が高まらない。

コミュニケーションの手段としての英語教育ならば今のシステムでは無理である。教師をすべて英語を母国語とする外国人にして、一クラスを20人程度にしなければならない。日本の英語教育には教養的な部分が含まれている。英語のスキル（話す、聞く、書く、読む）も大切であるが、他に外国人のものの見方、考え方、行動様式の違いなどを学ぶことで生徒の視野を広げ、他人の立場でものを考えることを体験させる。生徒が将来英語を使わなければならなくなった時に対応できる基礎力を高校までにつけておくことが肝要である。

学校の先生は教科指導と同じように生徒指導、部活動の指導等も行わなければならない。英語のみを教えるだけでは教師としてやっていけない。生徒はある意味モンスターである。同じことを飽きるほど言い続けないと定着しない。体力と根気が要る仕事である。しかしロボットではできない仕事。まさに「教育は人」次第である。

II 本当の英語教育の目標とは

「何で使いもしない英語勉強しなきゃいけないの？」ときかれる度に苦しい答弁をしてきた。自分なりに英語教育の目標をもっていないと、途中で力が抜けてしまう。指導要領の目標はごもったもなことはあるが、もっとくだった具体的なものが必要である。指導要領が改訂される度に少しずつ違った目標が掲げられてきた。その度に日本中が揺れ動いた。戦後間もない1947年の指導要領(試案)には、目標として次のように書いてある。

- (1) 英語で考える習慣をつけること。
- (2) 英語の聴き方と話し方を学ぶこと。

(3) 英語の読み方と書き方を学ぶこと。

(4) 英語を話す国民について知ること、特にその風俗習慣、日常生活について知ること。

ある意味これは理想論かもしれないが、極めて当たり前で、自然に受け入れることができる。学級の人数も 30 人程度、しかも毎日授業があるのがよいということも掲載されている。この上に実践的アクティビティをやれば、かなりのコミュニケーション力がつくと思われる。最近この資料を読み、まさに「目からうろこ」で 30 年以上、齷がかかった状態が一気に晴れたように思った。第一の目的は「聴き方にも、話し方にも、読み方にも、書き方にも注意しながら英語を生きたことばとして学ぶこと」と解説してある。つまりネイティブの考え方を学ぶことである。(1)から(4)まできちんと高校 3 年生まででできれば、相当な力がつく。今盛んに言われるコミュニケーション力も十分につく。1950 年以降日本の英語教育は「英語を翻訳する」方向に進んでいったようである。

III よい英語教師の条件

(1) 授業のうまい先生（授業がおもしろく、やる気がでる）

(2) 説明がわかりやすい先生

(3) 英語ができる先生

(4) I T に強い先生

(5) 勉強している（頑張っている）先生

他にもあるかもしれないが、まとめると上記の 5 つである。(1) は当然のことであるが、教師にとっては「授業が命」特に高学年になるとこの割合が高くなる。授業がきちんとできないと生徒は他のことでも言うことをきかない。(2) は質問をされた時に瞬時にわかるように説明できる力。いたずらに説明を長くするとよけいにわからなくなる。簡単明瞭であることが大切である。(3) はすべての基本である。今の状態をキープするのではなく、さらに伸ばすよう努力する。(5) とも重なるが、先生自身が生徒のよい見本になることが生徒に良い影響を及ぼす。生涯勉強の姿勢が必要である。(4) については、I T を使えばかなりの教材が手に入る。そして、授業をわかりやすくする手段として電子黒板、タッチパネル、パワーポイント等使えるようになることが望まれる。大切なことは 4 技能をバランスよく伸ばすための地道な勉強を続けることである。大学で学ぶことは本当に基礎的なことの一部である。生涯学び続け、前向きに授業に取り組むことが生きた見本として生徒にとって一番の刺激になる。

IV 英語科教育法のカリキュラム

現在英語科教育法 I から英語科教育法 IV までであるが内容は担当者により異なっている。以下のことを提案したい。

英語科教育法 I 英語科教員になる覚悟、英語教育の目的・目標の設定
教授法の概要、近隣諸国の外国語教育の実情調査

英語科教育法 II I を踏まえ、理論＋実践 で体験を主とする。
小・中・高の連携 基本的な指導技術の実践

英語科教育法Ⅲ 中学校の指導について 理論+実践 教案の書き方
学習指導要領の研究

英語科教育法Ⅳ 高等学校の指導について 学習指導要領の研究
高等学校の現状分析 模擬授業

英語科教育法Ⅰでは、まず英語教師になる覚悟をきめさせる。どのような目的をもって現場に出ていくか。どんな生徒を育てたいかなど。自分のスタンスを確認し揺るぎないものにする。そうしなければ厳しい採用試験をクリアすることは難しく、様々な問題を抱えた学校でやっていくことは容易なことではない。

広い意味の英語教育の基礎を学ぶ。2011年から正式に導入される「小学校外国語活動」についても学び、今までの「教育」との違い、小学校で行うことの意味を研究し、実践も行う。日本の英語教育はおよそ150年もの歴史があり、様々な教授法が取り入れられてきた。それぞれの教授法の特徴を研究し、同じ教材で教授法を変えて授業をやってみる。韓国、中国等近隣諸国の外国語学習の状況を研究する。学力検査やTOEICの国際比較の研究し、併せて自分のこと、時事問題等について発表、提案、討議等の活動を主としたものも取り入れる。教授法については過去60年間ぐらいに導入されたものを研究する。Grammar Translation, Direct Method, Oral Method, Oral Approach, Communicative Approach, Silent Way, Cognitive Code Learning, Suggestopedia, Total Physical Response, Communicative Language Teaching

英語科教育法Ⅱでは授業で予想される場面ごと（新出単語、文法、会話、読解、聴解、スピーチ等）の指導法。一斉指導、班活動、ペアーワーク、等授業形態等についての理論も学び、同時に実践も行う。1時間の授業をいくつかに分け、部分毎にマイクロティーチングを行う。

英語科教授法Ⅲでは中学校の授業について学ぶ。まずは学習指導要領の研究を行い、中学校での学習内容、指導上の留意事項等について学び、どのように実践していくか研究させる。チェック項目毎に模擬授業を入れ、全員が最低1回は授業ができるようにする。平成23年度から新しい学習指導要領が実施され、授業時間、教授内容の変化に伴い、新たな指導法を模索させる。

英語科教育法Ⅳでは高等学校の授業について学ぶ。教育実習で困らない最低の理論と技術を身に付ける。学習指導要領を研究し、現在求められている英語力について理解する。指導案の書き方、授業の進め方等理論と実践を混ぜて進めていく。名人と言われる先生方の授業も参観する。高等学校は学校により、学科、コースにより教科書が異なっており、学校設定科目もあるので、多様な科目に対応できる準備をする。

ⅠからⅣを通じて教育実習で立ち往生しない力をつけ、同時に英語教員になる意欲を高め更に精進できるような気力をもたせたい。

教授法はいくつもありそれぞれに良さがあるが、教師は自分なりの教授法を確立すべきであ

る。初任から数年かかり、大変なことであるがこの時期の勉強はその後の教師生活を支えるものになる。大学の教科教育法はさらにその下部を構成する力になる。

IV おわりに

私は 30 数年高等学校で英語教師をやってきたが、大半は大学入試に合格させるための指導を行ってきた。時々大学入試を悪だと言う人もいるが、私はそのように思わない。大学入学後あるいはもっと後になってその効果は出てくる。少なくとも何か具体的な目標をもって努力し達成するという体験は素晴らしいものである。「自力で何かを乗り越えた」ということは凄い自信になる。自分の授業を振り返ってみると訳読、言語活動、ゲーム、音読、帯リスニング、3 文エッセイ、スピーチ、通訳練習等様々な活動を取り入れてきた。所謂英語力を短時間で伸ばすのはリスニング（毎日決まった時間行う）であった。センターの点数が 80 点以上伸びた者が何人もいる。3 年生の 5 月の外部模試の点数が 40% ぐらいであったが、毎日繰り返し行うことで本番は 90% の得点。毎日の繰り返しがいかに大切か。愚直なまでに、同じ事を繰り返させる学習を教師がどう支えていくか。叱咤激励しながら伴走者のように一緒に学び続けることは大変であるが喜びでもある。学校現場の大変さばかりがマスコミで報道されるが、実際に学校に入ってみれば、たいていの子どもは明るく素直である。教員の仕事は地味で根気がいるが、楽しみは限りなく存在する。多くの志ある学生諸君が教師になって将来を担う国民を育ててもらいたい。

(参考文献・資料)

- ・ 指導要領（試案）1947年 文部省
- ・ 小学校学習指導要領 2008年 文部科学省
- ・ 中学校学習指導要領 2008年 文部科学省
- ・ 高等学校学習指導要領 2009年 文部科学省
- ・ 新学習指導要領にもとづく英語科教育法 望月昭彦編 大修館